

資料館だより

第 13 号

平成 2 年 10 月 1 日

編集・発行 武蔵村山市立歴史民俗資料館

武蔵村山市本町 5-21-1 TEL 0425(60)6620



村山町青年団陸上競技大会優勝旗

特別展示「武蔵村山の近代 —青年団活動を中心として—」

期間 平成2年9月2日～11月4日

1. はじめに

武蔵村山市立歴史民俗資料館では本年11月3日に迎える市制施行20周年を記念して特別展示「武蔵村山の近代—青年団活動を中心として—」を開催します。この展示では武蔵村山の行政区画の歩みと、昭和30年代まで地域行事の大きな担い手であった青年団の活動に焦点を当てて展覧していききたいと思います。

今から20年前の市制施行当時の武蔵村山には大きな都市化の波が押し寄せており、その前後数年間のうちにそれまでの景観を大きく変えることとなりました。さらに都市化の進展により産業構造も大きく変わり、農村的な生活構造も転換をせまられていきました。丁

度、昭和30年代から上水道の整備、家電品の普及などと相俟って「古い物」は急速に忘れ去られることとなりました。こうした風潮は地域の近代を語るべき貴重な資料をも失わせることになり、既に昭和10年代を成人として過ごしてきた人々からの聞き取り調査も難しくなっていることと合わせ、明確な歴史の構成を阻んでいます。

私たちは、市制施行20周年を機会に改めて、武蔵村山の歩みを振り返り、失われてしまった社会制度や資料にも目を向け、貴重な文化財を後世に伝える責務を果たしていききたいと思います。

2. 行政区画の変遷

武蔵村山市の近代の行政区画の変遷を年表式に見てみましょう。

明治元（1868）年6月

府藩県職制制度により旧幕府代官支配地（御領）であった中藤村、横田村、三ツ木村（一部除く）、岸村は菰山県に所属し、三ツ木村の旗本領は品川縣に所属する。

明治2（1869）年8月

品川縣に属していた三ツ木村の一部が菰山縣に所属替えとなる。

明治4（1871）年11月

廃藩置縣により4ヶ村は神奈川県に編入される。

明治7（1874）年6月

中藤村、横田村、三ツ木村は神奈川県十二大区一小区、岸村は同十二大区二小区となる。

明治17（1884）年6月

中藤村、横田村、三ツ木村、岸村の4ヶ村の聯合村となる。

明治22（1889）年4月

市制町村制の施行に伴い北多摩郡長の勧告を受け、中藤村外3ヶ村組合が設立される。

明治26（1893）年4月

中藤村外3ヶ村組合が神奈川県から東京府に編入される。



太政官高札（慶応4年）

明治41（1908）年4月

中藤村と横田村が合併し、中藤村外2ヶ村組合となる。

大正6（1917）年4月

中藤村、三ツ木村、岸村が合併し、村山村が成立する。

昭和18（1943）年

東京府が東京都となり、村山村も東京都北多摩郡村山村となる。

昭和29（1954）年11月

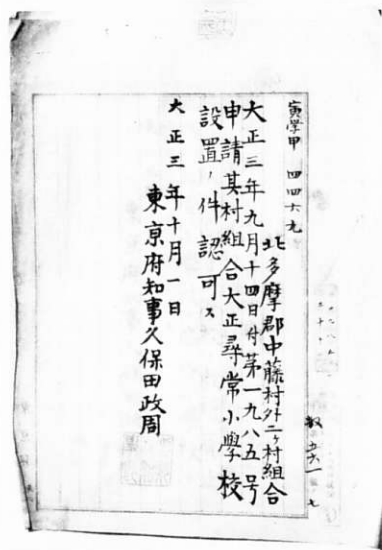
町制施行により村山町となる。

昭和45（1970）年11月

市制施行により武蔵村山市となる。

以上のような行政区画の変遷をたどるのですが、明治時代初期においては、地方制度の改変がめまぐるし

く、地方ではその対応に苦慮したものでと思われます。明治政府は旧支配（幕藩体制）の解体と政治組織の中央集権化を図るために、当時全国に6万以上もあった村々の統合整理を進めていきました。こうした過程において域内の村々も複雑な変遷をた



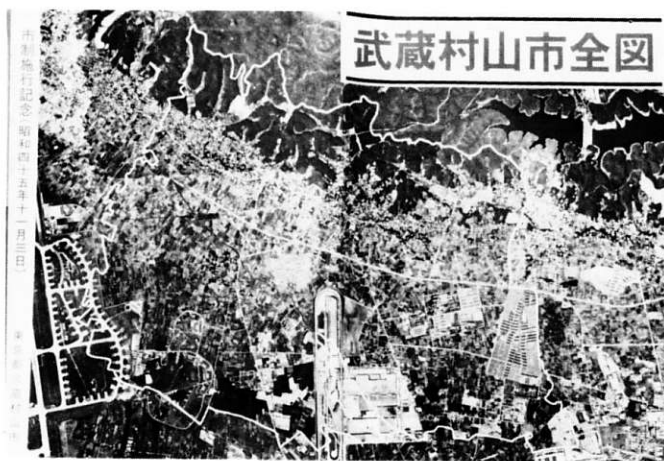
大正尋常高等小学校設立文書（大正3年）

どることになりました。

聯合村、組合村の設立と域内の村々も順調に統合への歩みをたどっているように見えたが、同じ北多摩郡の他町村に比べ、なかなか合併の動きが進まず、組合村として暫定的な期間が長く続くことになりました。その背景には各村の利害の問題があり、特に三ツ木村は1村独立の志向が強かったようです。

しかし、明治41（1908）年に中藤村と横田村の合併がなり、大正3（1914）年には域内に存在した扶桑日吉、三ツ木の3独立小学校の統合により大正尋常高等小学校が成立しました。こうした動きに引きずられるように大正6（1917）年中藤村、三ツ木村、岸村の合併がなり、村山郷の故地にちなんで村山村と名付けられました。ここに現在の武蔵村山市の基盤がほぼできあがりました。

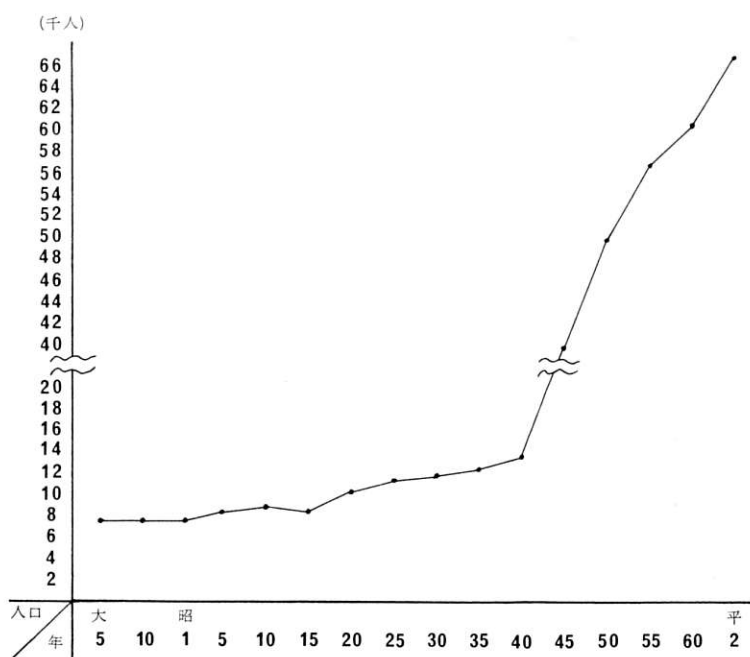
第1図は武蔵村山の人口の推移を示したグラフですが、第2次世界大戦の不幸な時代を過ぎた昭和20年には人口1万人を突破しました。昭和28（1953）年に町村合併促進法が公布され、村山村、大和村、東村山町の合併について東京都町村合併促進審議会より提案されましたが、3町村ともその意志がなく、全く話題に上りませんでした。むしろ村山村や大和村は町制施行の条件である人口8千人以上の条件を満たしていたため、単独町制施行



市制施行記念の航空写真

に踏みきることになりました。昭和29（1954）年11月を期して村山町となり、以後、町内への大企業の誘致を図るなど新たな産業振興に努めると共に次第に大都市圏のベッドタウン化が進んでいきました。

昭和40年代に入ると大規模な都営団地や中藤、三ツ木の分譲住宅の建設が始まり、大幅な人口の伸びを記録することとなりました。こうした人口増に伴い、学校等の公共施設の建設も行われ、町内は空前の建築ラッシュに沸きかえりました。昭和45（1970）年市制施行特例法の公布と共に、高まってきた行政需要に応えるべく同年11月武蔵村山市が誕生しました。



第1図 武蔵村山の人口の推移

青年団は昭和30年代まで地域の様々な行事や娯楽、社会奉仕の担い手として活躍してきました。ある部分ではこうした青年団の活動が地域の近代の歴史を支えてきたといっても過言ではないでしょう。今ではすっかり消えてしまった青年団活動を通して、改めて武蔵村山の近代をたどってみましょう。

武蔵村山での各地区青年会発足の動きについては記録類が無いため詳細は不明ですが、幸い関東実業新聞十周年記念号中の「村山村誌」（大正7年6月6日発行）に村山村青年会の沿革について記述があり、各地区青年会創立の年代がわかります。明治26年の原山青年会の創立から始まり、いずれも明治時代末までに創立されており、全国的な青年会発足の風潮とよく合致しています。また、活動内容についても「村山村誌」中に農事試作場、桑園の植林、貯金組合、協同肥料購買、名士の講話の開催などがあげられています。その他原山青年会の大正3年以降の「記録」にも除雪作業、街灯の設置、第一次大戦出征兵士慰問の芝居興業、出征兵士留守宅の家事手伝いなどの活動について記されています。このような地域に根ざしたきめ細かな活動

●**村山村青年會**
本村には原山青年會の明治二十六年に創立され、同三十年には神組三十一年には岸村厚信會、三十二年には萩赤同志會、三十七年には横田、鍛冶ヶ谷戸、三十九年には青年農業會、四十二年には三ツ木立志青年會、四十四年には中村自強會等創立なりてより何れも農事試作場、桑園、植林、貯金組合等の事業中就中桑園の如きは各會共六七反を有し貯金も一ヶ年を限度とするものと三四年を限度とするものとありて千圓より二三千圓に至るものあり其他協同肥料購買を實行なし地方の實益を圖られ又た名士の講話を開催し人心の德化を計る等個々分立され居たるも各會共熱心着實なる事業の遂行を示し來るものなるを大正七年三月十日村内各會を一團となし村山青年會と改稱されたるものにして今後の活動推し進めしむべきなり、會長以下役員左の如し

△會長諸江吉五郎 △副會長進藤周輔 △鍛冶ヶ谷戸支會長關田清吉 △谷口同高橋文吉 △堀内野賴太 △神明同藤野三太郎 △山中田久三 △萩赤同志會 △三ツ木立志青年會 △横田同荻野川五郎 △馬場同宮崎祐治 △峰岡同石川一馬 △谷戸同石井佐平 △宿岡同代安造 △殘堀比留岡義雄 △岸岡福非幸利

大正三年三月
託
錄
三月
三事

こうした各地区青年会の活動を基盤に村山村誕生後1年を経た大正7年3月10日に村山村青年会が発足し、組織の系列化が図られていきました。この時の様子を原山青年会の「記録」は次のように記しています。

「大正七年三月ヨリ村山村十四会ガ合併シテ村山村青年会トナリ即時本会ハ原山支会ト改名ス」



— 4 —

4. 戦前の青年団活動

大正時代に郡あるいは町村単位の青年会が組織化されていく中で、大正10年に日本青年館が建設され、さらに大正14年に大日本連合青年団が結成されて、ここに初めて青年会（団）の全国組織化が図られました。これによって村山村青年会も昭和2年3月を期して村山村青年団と改称し、各支会も分団と改められました。

以下、昭和10年当時の青年団の組織、活動内容を見てみましょう。

(1) 本団の組織と活動内容

団長（1名） 青年団全体の統括^{とうかつ}を行い、昭和初期までは村の有力者が就任していましたが、昭和11年以降青年団経験者の中から選ばれるようになりました。任期は2年。

副団長（2名） 青年団の実務を統括しており、青年団常任幹事あるいは分団長経験者の中から選ばれていました。任期は1年。

（庶務）専任幹事（1名）

本団の庶務を担当し、村役場の吏員^{いん}が継続して就任していました。

（会計）常任幹事（1名）

本団の会計を担当し、副団長同様分団長経験者の中から選ばれていました。任期は1年。

部長、副部長（14名）

各地区分団長14名が修養部、体育部、産業部、社会部の4部の部長、副部長を担当し、本団の運営に参加しました。任期は1年。

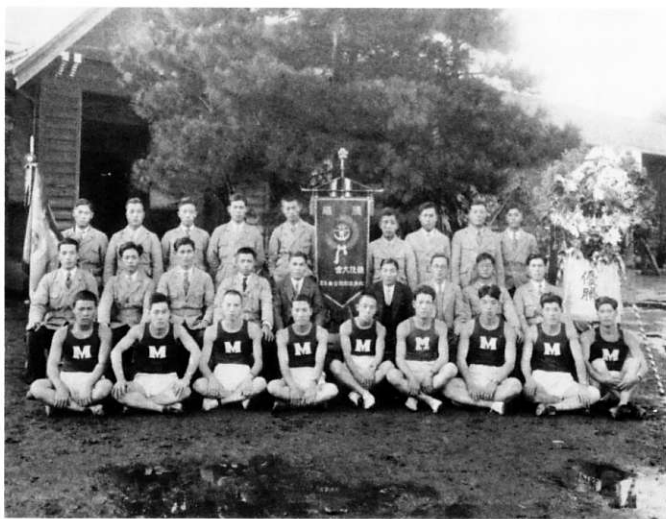
本団の活動は基本的には各分団の活動の指導及び総括でしたが、村青年団の全体的な行事の開催や北多摩郡、東京府の各種行事への代表派遣なども行いました。村青年団全体行事としては修養部主催^{そうてん}の早天修養会や講演会、産業部主催の農産物品評会が行われました。体育部主催の新年駅伝大会は東村山一箱根ヶ崎の区間を分団対抗の形で争うもので昭和10年から始められました。また、秋季陸上競技大会も昭和6年から始まり、村民を大いに沸かせると共に多くの名選手も生み出しました。その他時局を反映して出征兵士の見送りや遺骨の出迎えも青年団の重要な役目でした。さらに、昭和6年からは村山村青年団の1年の活動報告や論文、



青年団講演会（昭和10年）

俳句などを掲載した「団報」も発行されました。論文には軍国的な色合いの濃いものが多いのですが、全体的には文章の格調が高く、当時の青年達の強い学習意欲がうかがえます。大日本連合青年団発行の雑誌「青年」東京版にも投稿する青年がいるほどでした。

青年団本団の役員会議や活動の場所には、大正尋常高等小学校の教室や村役場が使われていました。



北多摩郡青年団陸上競技大会
記念写真（昭和8年頃）



村山村青年団団報

昭和16年4月から青年団は少年団体と統合され、大日本青少年団となり、村山村でも青年団は青少年団に改められ、大正尋常高等小学校長を団長とする組織になりました。青少年団の結成は各種団体の大政翼賛化の一環でこれ以後、国家総動員体制の中で戦争への道を進んでいくことになりました。しかし、青年団の活動は軍事的色彩を強めながらも、従来の活動は継続されました。

(2) 分団の組織と活動内容

分団の場合、各地区の義務教育修了者はほとんど半強制的に入団させられるため、年齢順の序列がはっきりしており、役員は古参者が就任しました。

分団長（1名）分団の統括をし、本団の運営にも参加しました。任期は1年。

副分団長（1名）

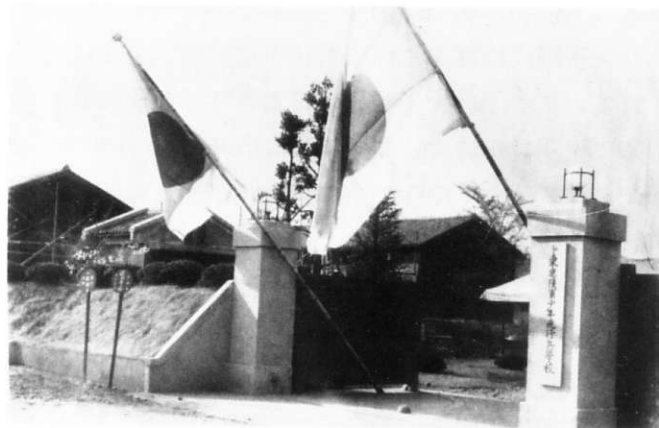
分団長の補佐役。任期は1年。

会計係（1名）分団の会計を担当。任期は1年。

幹事（5名）分団員のまとめ役。修養班、体育班、産業班、社会班、徳育班の班長も務めました。任期は1年。

各分団の活動は地域に密着した内容を持っており、非常に多彩でした。各分団共通のものは、体育活動として分団対抗の新年駅伝大会や秋季陸上競技大会の練習があり、修養活動には早天修養会、講演会などがありました。しかし、分団活動の特色は地域に根ざした産業、社会奉仕活動にありました。列記すると、桑園、農場の耕作、肥料協同購入、組合貯金、大麦黒穂予防の消毒、養蚕用簇の製造、茶・養蚕用炭の購入、各種標識の設置、除雪作業、道路補修、神社の清掃、野ねずみの駆除、危険物入れ箱の設置など数多くあげることができます。その他、分団ごとに特色のある活動もみられ、後ヶ谷戸地区の理髪講習会や宿地区薬師念仏鉦はりの伝承、地域の神社の祭礼への参加、地域住民に娯楽を提供した素人演芸なども行われました。特に宿分団の薬師念仏鉦はりの伝承は江戸時代以来の若者組からの伝統が感じられます。それは「宿の青年で鉦はりの出来ないことは恥だ、娘にもてない。」といった考え方や青年団幹部による薬師堂縁日前日の「おこもり」の行事などから類推されます。

このように地域の貴重な無形文化財の伝承や産業、社会奉仕、娯楽というように青年団の果たした役割は大変重要でした。



東京陸軍少年飛行兵学校正門



戦時農園講義録



宿青年団素人演芸（昭和18年）



薬師堂に集う宿青年団（昭和15年）

5. 戦後の青年団活動

戦時中の青年団は、その実質的な運営者がほとんど出征し、残された低年齢者も軍への奉仕活動に出なければならず、活動が細々と続けられる程度でした。また、女子青年団については戦前の資料が全く無く、実態があまりよくわかっていません。昭和初期にはまだ発足していなかったようで、昭和10年前後に組織され、主に銃後活動、軍への奉仕活動が行われていたようです。

昭和20年8月、日本は終戦を迎え、^{こうはい}荒廃した国土や人心の再建に向かって動き出さねばなりません。やがて青年達も復員し、青年団活動も再開され、昭和21年3月3日を期して旧青少年団は解散され、新制村山村男女青年団結成式が挙行されました。ここに戦後の青年団が発足し、新たな歩みを踏み出すことになりました。戦後の青年団本団の組織をみると、大筋では戦前とほぼ同じですが、活動部門が大幅に増えました。男子は総務部、文化部、産業部、体育部、厚生部、会計部、庶務部があり、女子には文化部、産業部、体育部、厚生部、生活研究部、庶務部が設けられていました。特に厚生部、生活研究部の新設が戦前と比較すると注目され、生活環境の衛生化や婦人会と共に新生活運動の推進と生活改善の活動にも力が注がれました。また、体育活動は戦前から「村山名物」となっていた東村山一箱根ヶ崎間の新年駅伝大会、秋季陸上競技大会の他、北多摩郡陸上競技大会、狭山湖駅伝大会などへの代表の派遣も行われました。昭和30年代までは青年団による体育活動は戦前同様盛んで、村（町）民に大きな楽しみを与えてくれました。文化活動では社会教育法による青年学級の運営が青年団によって行われ

ました。青年学級には様々な講座が設けられ、国語、社会、数学などの学校教育科目の延長から手芸、料理、生花、習字、カメラ、コーラスなど趣味的なもの、さらに農業研究など独自の研究部門まであ



秋季陸上競技大会男子優勝杯



円谷幸吉氏と共に狭山湖駅伝大会記念写真（昭和42年）

りました。文化活動として、他に注目されるのは町立図書館の運営がありました。町立図書館は村時代の昭和26年の設立で、それ以前に村民有志により設立、運営されていた「村山文庫」が母体となっていました。しかし、運営面で特定の個人に大きな負担がかかり過ぎるため、昭和32年から青年団事業として青年団が図書館運営を行うことになりました。当時の社会状況を考えると青年団のこうした文化活動はまさに先進的であったといえるのではないのでしょうか。

青年団本団の機関紙としては、昭和20年代前半までは戦前同様「団報」が発行されており、事業報告、論文、^{ずいひつ}随筆、詩などが掲載されていました。昭和20年代後半からは月刊で「青年新聞」が発刊され、団の活動などが報告されました。また、文化部では昭和22年か



小金井市浴恩館での青年団研修（昭和21年）



青年新聞（昭和31年）

ら文芸誌「息吹き」を発行し、多くの文芸作品の発表の場となりました。

分団の活動では、戦後の娯楽の少ない時期には素人演芸が大変な人気を浴びました。各地区分団とも神社の祭礼時には^{またたび}股旅もの、日本舞踊など趣向を凝らした出しものを演じました。その中でも特に谷ツ分団の活動は特筆すべきもので、当時谷ツ地区に疎開していた俳優の山村聡氏の指導を受けて演劇に熱中しました。

6. まとめ

前にも述べたように昭和30年代までは青年団活動は盛んで、地域と密接に結びついていました。考えようによっては、武蔵村山の近代を地域レベルの底辺で支えてきたともいえるのではないのでしょうか。武蔵村山は昭和40年以降、都市化の波により急激な人口増を迎え、景観や産業構造に大きな転換がみられました。それと共に青年団の活動は、青年達の進学率の上昇や地域行事離れにより次第に下火となってしまいました。昭和40年代は既に各地区分団の活動は停止状態で、本団のみの運営となっていました。

歴代青年団長（ ）は青少年団副団長

年代	氏名	年代	氏名
S2～S5?	榎本 源蔵	S30	内野 利次
S6～S11	諸江 吉夫	S31	田中 弘
S12～S13	乙幡 房治	S32	宮崎 昭司
S14～S15	栗原 政蔵	S33	荒田 実
S16～S18	内田長作（山崎栄作）	S34	高橋 義明
S18～S19	内田長作（網代栄次）	S35	本木 金次
S19	内田長作（山崎只雄）	S36	本木 勝治
S19～S20	内田長作（榎本 茂）	S37	井上 誠
S21	榎本 茂	S38	乙幡 安治
S22	豊泉 修	S39	比留間貞雄
S23	藤野 吉男	S40	萩野 和男
S24	萩野 忠一	S41	内野 煬持
S25	奥住 芳之	S42	小川 文雄
S26	中村 仁平	S43	水越 翔平
S27	野村 慶睦	S44	乙幡 芳正
S28	古川 基一	S45	豊泉 悦雄
S29	乙幡謹一郎	S46	島田 康久

また、プロの楽団の指導を受けて音楽の練習も行いました。こうした成果は病院の慰問などの奉仕活動の際に披露されたり、さらにNHKのラジオ番組「農村に送る夕」に出演したりと大変な話題になりました。当時、谷ツ分団によって上演された演劇の題名は「峠の坂道」、「地藏教由来」などで社会派の演劇であったそうです。



谷ツ青年団による演劇（左が山村聡氏）

昭和45年11月を期して武蔵村山市は誕生しましたが奇しくもその翌年、武蔵村山市青年団は解散することになりました。青年団の活動というごく限られた視点からではありますが、武蔵村山にとって「近代」は武蔵村山市の誕生と共に終わり、その後、現在に至るまでの20年は「現代」の序章であるように思われます。

最後になりましたが、今回の特別展示の開催にあたり、多くの方々から青年団活動の内容や資料について御教示、御提供いただきました。ここに御芳名を記し心より感謝申しあげます。

市内	浅野兼次郎	池谷	タカ	井上	誠
	植野 重雄	内野	昭	内野	喜助
	内野 桂治	内野	シズ	内野	武
	内野 忠次	内野	房司	乙幡	泉
	乙幡謹一郎	乙幡	弥寿夫	乙幡	安治
	小山 友七	下田	九一	進藤	常吉
	田口 栄一	高橋	正男	種村	暉
	水越 翔平	宮崎	昭司	本木	金次
	柳下 喜市	山崎	栄作	山田	寿一
	山田 直良	渡辺	計好	原山	自治会
市外	日本青年館				